古田史学の会

壬申の乱と隠された九州
～英雄に祭り上げられた天武
大阪府立大学講師の正木裕氏が講演

今年は壬申の乱から1350年に当たる。壬申の乱とは、672（天武天皇元）年6月24日～7月23日に起こった古代日本最大の内乱であるとされている。日本書紀を読む限り、大友皇子と大海人皇子の王位継承を巡るお家騒動のようにしか見えない。ではなぜ、古代日本最大の内乱とされるのだろうか。ちまたでは、いろんな説が百花繚乱（りょうらん）だ。そんな中での最新の有力な試論を追ってみた。

最新の有力試論を解説

2022年8月23日、県立図書情報館で第42回古代大和史研究会が開催され、大阪府立大学講師の正木裕氏が「壬申の乱と隠された九州～英雄に祭り上げられた天武」と題して講演した。「①隠された倭姫王（やまとひめおきみ）②隠された九州の吉野③高市皇子と九州王朝④高市皇子と王朝交代」という構成で、わかりやすく解説したので、以下にその講演要旨を記述する。正木氏は日本最大のアマチュアの文献史学の会、古田史学の会（古賀達也代表）の事務局長も務めており、故・古田武彦氏の九州王朝説をさらに発展させる事にも貢献した。

講演する正木氏

①隠された倭姫王
「倭姫王」は九州王朝の姫

【天智の死に際し、大海人は「倭姫王」を天皇に推挙するが大友が後継に】

①倭姫王の出自は不自然。倭は本来ヤマトとは読めない。中国王朝から「倭国」と呼ばれたのは金印下賜以来の九州の国。天智は、大田皇女（後の天武妃）、遠智娘（持統天皇となる鸕野皇女を産む）、姪娘（元明天皇となる阿陪皇女を産む）、伊賀采女宅子娘（大友皇子を産む）を差し置き、謀反の罪で妃妾子等皆殺しにした古人大兄の娘の倭姫王を皇后としている。

②天智即位と倭姫王との婚姻は不即不離。即位は668年1月（それまではなぜか称制）、婚姻は2月とあるが、これは「式典の順序」で、実際は婚姻により即位することができたと考えられる。

・天智即位…『書紀』天智7年（668）正月戊子（3日）に、皇太子、天皇に即位す。

・倭姫王を皇后に…『書紀』同年2月戊寅（23日）に、古人大兄皇子の女倭姫王を立て、皇后とす。

③「倭姫王」は大海人が天智の後継天皇に推挙する重要人物なのにその後の消息が一切記されない…『書紀』天智10年（671）10月庚辰（17日）（大海人）請ふ、洪業（ひつぎ）を奉（あ）げて大后に付属（さずけまつらむ。「天武即位前紀」陛下、天下を挙げて皇后に附（よ）せたまへ。

【『書紀』の倭姫王と九州の「大宮姫」伝承が整合】

倭姫王はヤマトでなく倭国（九州王朝）の姫。

『開聞古事縁起』の大宮姫は白雉元年庚戌（650）に薩摩の磐屋で誕生。2歳で太宰府に上洛（※陸地より上洛とあるから太宰府）。その後13歳（白鳳2年・652）で近江に遷（うつ）り665年に「天智」の皇后となる。天智崩御後（671年）大海人の支援を受けるが、大友に追われ九州に帰還する。大宮姫が倭姫王で九州王朝の姫なら天智が倭姫王をめとり即位できたのも、大海人が倭姫王の天皇即位を主張したのも理解できる。天智は倭姫王の婿として事実上倭国（九州王朝）の王の権限を得て、近江令や「庚午年籍」の策定、国号変更等を行うことができた。しかし「大友」は九州王朝とは無縁の人物で皇位を継げる者ではなかった。そこで倭姫王を推す大海人と倭姫王は、白村江で捕虜となり667年（『書紀』では671年）筑紫都督として帰国した筑紫君薩夜麻と、彼を任命した唐の使節・軍のいる九州に逃れ、近江朝の転覆をはかった。これが壬申の乱の実際だった（倭姫王13歳662年は伊勢王崩御の翌年。「壹與」は13歳で即位したように13歳は即位年にふさわしい。倭姫王は伊勢王の次代の天子か）。

近江宮から奈良吉野宮までの行程

②隠された九州の吉野
大海人が逃れたのは九州

【隠された「大海人が逃れたのは九州の吉野」】

大海人は九州に逃れ薩夜麻・唐の支援で近江朝大友を討伐した。

①近江宮から奈良吉野宮までの行程日数は創作。幼い草壁・忍壁、舎人ら20余人・女孺10余人を同伴し、19日近江発、20日吉野宮到着とする。

②吉野宮とされる宮滝付近は袋のねずみのような地で、「虎に翼をつけた」と恐れるのは不自然。

③671年10月から672年6月まで吉野宮に滞在したとされるが、考古学上も天武時代に多数の同伴者や臣下・兵を収容できる施設は存在しない。「吉野宮滝遺跡」の主要建物は聖武天皇時代。天武・持統朝は2×6間と2×4間の掘っ立て柱建物が東西に2棟。

④人麻呂の吉野宮の歌は奈良吉野の宮滝付近に合わない。

◆36番歌（吉野宮に幸しし時柿本朝臣人麻呂の作る歌）「山川の清き河内と御心を吉野の国の花散らふ秋津の野辺に宮柱太敷きませばももしきの大宮人は舟並めて朝川渡る舟競ひ夕川渡るこの川の絶ゆることなくこの山のいや高知らす水激る瀧の宮処は見れど飽かぬかも」（宮滝に舟を競える川幅や滝はない）

【九州王朝―都督薩夜麻と唐に支援を求めた大海人】

白村江で捕虜となった東夷の酋長は皆「都督」に任命され帰国した。

①九州には筑紫都督薩夜麻と郭務悰等唐の使節や兵が駐留（『書紀』天智6年に「筑紫都督府」）。

◆天武元年（672）3月己酉（18日）内小七位阿曇連稲敷を筑紫に遣し、天皇の喪を郭務悰等に告ぐ。

②佐賀には「吉野ヶ里」などの吉野地名や、滝、大規模船団が停泊できる有明海がある（佐賀には吉野地名や、万葉歌に整合する滝や舟遊びできる川がある。有明海岸は鑑真上陸の地とされ記念行事も）。

③『釈日本紀』に天武が唐人から戦術を教わった記事がある。

◆『釈日本紀』（調連淡海・安斗宿祢智徳等日記に云ふ）天皇、唐人等に問ひて曰はく「汝の国は数（あまた）戦ふ国也。必ず戦術を知らむ、今如何」と。一人進み奏して言ふ、「厥（それ）唐国は先に覩者（ものみ）を遣し、以て地形の陰平及び消息を視さしむ。出師の方、或は夜襲、或は昼撃す。但し深き術は知らず」といふ。（※壬申の乱で天武に従った舎人の日記）

④万葉集に大海人が九州に支援を求めたと考えられる27番ほかの歌がある。

【近江朝は西の九州からの侵攻を最も恐れていた】

大友側の対応を見れば「壬申の乱」が、『書紀』に記すような近畿に限定した戦いではなく全国を巻き込んだ大乱だったことがわかる。つまり大海人が東から攻めてくるのに、大友側が東に逃げようとするのは不自然。

◆天武元年（671）6月。近江朝、大皇弟東国に入ると聞き、群臣悉に愕（お）ぢて、京の内震動（さわ）ぐ。或は遁れて東国に入らむとし、或は退きて山澤に匿むとす。爰に大友皇子、群臣に謂（かた）りて曰はく、「将何に計らむ」と。臣進みて曰はく、「遅く謀（はからば後（おくれ）なむ。しかし、急に驍騎を聚めて跡に乗りて逐（にげ）むには」といふ。皇子従はず。

【大友皇子側は大海人皇子に組しないよう全国に命令】

全国への遣使は、乱が「全国的騒乱」であることを示す。

①【東国】則ち韋那公磐鍬・書直薬・忍坂直大摩侶を以て、東国に遣す。

②【大和】穂積臣百足・弟五百枝・物部首日向を以て、倭京に遣す。

③【西国】且つ、佐伯連男を筑紫に遣し、樟使主盤磐手を吉備国に遣して、並びに悉に兵を興さしむ（兵を徴発）。仍りて、男と磐手に謂ひて、曰く、「其の筑紫大宰栗隅王と吉備国守當麻公廣嶋の二人、元より大皇弟に隷（つ）きまつること有り。疑は反くこと有らむか。若し不服（まつろはぬ）色（けしき）あらば、即ち殺せ。」とのたまふ。

③―1【吉備】磐手、吉備国に到り符（おして）を授（たま）ふ日に、紿（あざむ）きて廣嶋に刀を解かしむ。磐手、乃ち刀を抜き殺しつ。

③―2【筑紫】男、筑紫に至る。時に栗隈王、符を承けて対へて曰さく、「筑紫国は、元より邊賊の難を戍（まも）る。（略）輙（たやす）く兵を動さざることは、其れ是の縁なり」とまうす。時に栗隈王の二の子、三野王・武家王、剣を佩きて側に立ちて退くこと無し。是に、男、剣を按（とりしば）りて進まむとするに、還りて亡されむことを恐る。故、事を成すこと能はずして、空しく還りぬ。

【筑紫・吉備への遣使は佐賀吉野に赴いた天武への対抗措置】

大友側が重要視したのは「西」への備え。

大友皇子側が「虎に翼をつけた」と恐れたのは、大海人が唐と筑紫の勢力を味方につけるから。『書紀』には、大友側は筑紫・吉備に使者を送り「兵を起こし大海人を攻める」よう申し入れたが拒否されたと記す。吉備国守を殺したのも、筑紫から攻め上ってきたときに、吉備は重要な位置にあったから（筑紫も吉備も大友側に付くことを拒否する）。

【佐賀吉野は軍事基地だった】

佐賀吉野へは大宰府・唐津から軍用道路が伸びていた。

◇軍用道路

佐賀県には「道路様版築土塁」が存在する。その代表が三養基郡上峰町の「堤土塁」（大字堤字迎原。現存規模東西長約300㍍。東側で幅が10～15㍍。高さが1・5～2㍍。西側で幅34～40㍍、高さ4～5㍍）。これは、軍事防衛施設の「水城」や

堤土塁

前畑土塁

「大野城（大野山城）」と同じ「版築工法」で7世紀に造られ、大宰府を起点とし吉野に通じる古代の「軍事用の高速道路」だと考えられる。また玄海灘へは「壱岐道」も伸びていた。

◇軍港機能

有明海は潮の干満差が大きく、かつ規則的で、古代の干満を利用した停泊に適し唐の船団も停泊していたと考えられる。

【天武の「佐賀なる吉野」入りを記す万葉25番歌】

（25番）「天皇（天武）の御製の歌」み吉野の耳我の嶺に時なくぞ雪は降りける　間なくそ雨は降りけるその雪の時じきがごとその雨の間なきがごと隈もおちず思ひつつぞ来しその山道を（↓奈良吉野に「耳我の嶺」はない。一方、佐賀吉野ヶ里の東に「嶺（三根、上峰町）」（耳我は「尊く聳える」意味の嶺の枕詞。）。そこに大宰府につながる堤土塁がある。天武は「唐の支援が得られるか不安の中、佐賀なる吉野への道を歩んだ。その心境を歌ったものだった（耳我の嶺は3293番で「御金が岳」に変えられている）。

【天武の万葉27番歌は唐の支援を取り付けた天武の喜びの歌】

淑人乃良跡吉見而好常言師芳野吉見〈与・多〉良人四来三・淑人（シュレン）＝徳のある善良な人

・好（ハオ）＝はい、同意する

（27番）「淑き人のよしとよく見てよしと言ひし吉野よく見よ良き人よく見（※多良人よく見）

これは不安と悩みの中で吉野に入った天武は、駐留していた唐の郭務悰から、支援を取り付けることができた。27番歌はその喜びを表した歌だと考えられる。淑人も好も中国人に対する言葉にふさわしい。多良も有明海岸に存在する。

【唐の支援を求めて吉野に赴いた時の大海人の不安な心情を表している人麻呂の244番歌】

（244番、人麻呂之歌集出）み吉野の御船の山に立つ雲の常にあらむとわが思はなくに

吉野郡吉野町樫尾の「御船山」とされるが、何ら特色もないし伝承もない。

一方、佐賀県武雄市に「御船山」があり、一見明白「船の形」をしている。そして、佐賀吉野から唐の船団の駐留する多良に向かう行程上に位置する。天武は唐の支援が得られるか不安な中で吉野から御船山を通り多良に向かったとすれば、唐の支援を求めて吉野に赴いた時の大海人の心情を表す歌にふさわしい。25番・27番・244番は天武が唐の支援を求めて佐賀吉野から唐の駐留地に向かう際の一連の歌だった。そして、27番は唐の支援が得られた時の喜びの歌だった

（25番）み吉野の　耳我の嶺に　時なくぞ　雪は降りける　間無くぞ　雨は降りける　その雪の　時なきがごと　その雨の　間なきがごと　隈もおちず　思ひつつぞ来る　その山道を

（27番）淑き人のよしとよく見てよしと言ひし吉野よく見よ

（244番）み吉野の御船の山に立つ雲の常にあらむとわが思はなくに　〈7面につづく〉

吉野町の三船山（右）と佐賀県の御船山